

# 文献センター通信

第5号  
2007年11月25日  
一部100円

主な内容
会費納入と新規入会のお知らせ
2008年版カレンダー発売
藤本文庫・紹介
望月桂の手紙、和田久の墓
文献センター自己紹介 4
富士宮だより
運営委員会議事録
8 7 6 5 2 1 1

一昨年夏の富士宮交流会では、アナキズム文献センターを今後どうするかの話し合いを持ちました。その次の年、昨年の夏の交流会では、当センターは当面は任意

昨年の夏以降に会員になられた方は、是非、継続して来年度の会費の納入をお願いいたします。また、新たに会員になってくださる方を中心に求めています。

運営には、どうしても経費が掛

## 継続会費納入のお願い

### 新規入会も大歓迎です

団体として歩むこととし、規約を承認し運営委員会が中心となって管理・運営をする「アナキズム文献センター(CIRA-japana)」を発足させ、今日に至っています。

規約にあるように、年度始まりは毎年一月一日となっています。

かります。そのために運営委員会から派生する形で実行委員会が「アナキストカレンダー」を作り、Tシャツを作り、費用を捻出するべく努力を重ねています。でも、やはり会員の方々の支えが必要です。できるだけ多くの方が、このアナキズム文献センターを支え

## 08年版カレンダー発売!



▼表紙と解説▼  
ケース(スタンド)が付いています

2008 Kalendaro

申し込みは、Eメールでお願いします。また、ホームページで案内している取扱書店などで直接、購入することもできます。

ケース(スタンド)に当センターへの入会申込書と同封していますので、入会もよろしくお願いします。

てくださることを願っています。

来年度にはいよいよ法人化の検討を始めることになっています。人的なパワーもまた必要になっていくことでしよう。東京近辺の方は、お力をお貸しください。(き)

今回は、卓上型としました。はがきを横にしたサイズです。使用している図版・写真類の大半は当文献センターの活動の中で出会ったものです。資料整理の過程で発見した写真などやこの一年間の国内外の活動に関するものなど。中には、懐かしいものがあるかもしれません。

一部五〇〇円(送料込み)。会員の方には、既に発送してありますので、購入希望の方は入金をお願いします。

## 藤本文庫・紹介

名古屋の「橘宗一少年墓碑保存会」の運動で活躍しておられた藤本功さんが6月14日に亡くなられ、その蔵書が文献センターにこの度、寄贈された。藤本文庫として整理・保存していく予定ですが、整理する中で「国救・さとう文庫蔵書」と押印された本の多いことが判明し、寄贈の労をとっていただいた名古屋の黒沢和子さんにその来歴を問い合わせたところ、以下の返事をいただいた。蔵書の由来を知るためにも、佐藤富美、藤本功さんの略歴を合わせて以下に紹介します。

※文献センターでは蔵書目録を作成中で、その一部を本紙数号にわたって順次掲載します。

### 「国救・さとう文庫」

#### について

—国救というのは、日本国民救援会の略で、さとうというのは佐藤富美さんのことです。佐藤さんと藤本さんが結婚されたはずと後のことで、佐藤富美さんが亡くなる数日前のことでしたが、それまで富美さんは名古屋の婦人有権者同盟の支部長をやっており、有り余る財産を、有効に使いたいと思っておられ、そういう

形で何かと援助

しておられました。

富美さんは

1984年に74

歳で亡くなりま

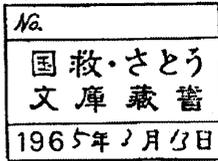
したので、その

後はそういう形で本が並べられるということはありませんでした。

#### 佐藤富美さんの略歴

1910年(明治43年) 3月11

日生まれ。



1922年(大正11年) 4月、愛知県立第一高等女学校入学、26年3月同校卒業、4月同校高等科英文科入学(同科の生徒数13名)し、29年3月同校高等科卒業。

1934年(昭和9年) 2月25日、

愛知共産党2・25事件で逮捕される。不起訴(官憲は名古屋市内64カ所のアジトを急襲、富美さんは新栄署に留置、取り調べを受けた。3月10日までに157名検挙、13名(うち女性は加藤綾子のみ)起訴。

戦後は日本婦人有権者同盟に参加、名古屋支部長を長く務め、また日中友好運動、松川事件被告の救援運動に参加、婦人団体や日本国民救援会愛知県本部、愛知人権連合の役員、橘宗一少年の墓碑保存会世話人等を歴任。人民解放運動に生涯を捧げた。

1984年1月14日、肝臓がんのため死去。享年73歳。

佐藤富美遺文集『つらつら椿』(私家版)がある。この遺文集『つら

つら椿』は、2001年3月までに藤本功氏によってまとめられているが、同年12月藤本氏の事故により、2003年5月、北川宏氏、黒沢和子氏らによって刊行された。

#### 藤本功さんの略歴

1915年(大正4年) 10月1日、長崎県に生まれる。小学校低学年時に、母の再婚により、中国大連に引越す。大連一中から早稲田高等学院に進み、昭和14年早稲田大学卒業。大連船梁(通商大連下ッグ)に勤務、昭和20年7月召集され朝鮮半島にて敗戦。

戦後、大連にて日本への帰還者運動に従事、帰国後日本共産党愛知県委員となる。日本国民救援会(専従)役員として松川事件はじめ八海事件、三鷹事件、帝銀事件、大須事件、島田事件、白鳥事件など多くの冤罪事件の真相究明に取り組む。この間共産党を離れ、日本国民救援会愛知県本部をへ

## 藤本文庫・目録(第1回)

神山茂夫研究 第一号(1975・10)～第六号(1979・04) 付・「通信」第一号～第三〇号

神山茂夫研究会編集

- 通信 方位 第一号(1972・04)～第三四号(1974・12) 付・「有声」「お知らせ」 クラブ有聲社
- 通信 方位 第三五号(1975・01)～第七三号(1978・05) クラブ有聲社
- 通信 方位 第七三号(1978・06)～第一〇四号(1981・05) クラブ有聲社
- 通信 方位 第一〇〇号(1981・01)～第一四五号(1985・04) クラブ有聲社
- 通信 方位 第一四六号(1985・05)～第一九一号(1990・04) クラブ有聲社
- 人権のひろば 第一号(1965・01)～第五〇号(1969・10) 愛知人権連合編集 愛知人権連合
- 人権のひろば 第五一号(1970・01)～第一八五号(1982・10) 愛知人権連合編集 愛知人権連合
- あいち松川通信 第三号(1960・01)～第四〇号(1964・11) 愛知松川事件対策協議会
- あいち松川通信 第三号(1960・01)～第一五号(1961・06) 愛知松川事件対策協議会
- あいち松川通信 第一六号(1961・07)～第四〇号(1964・11) 愛知松川事件対策協議会
- 救援通信(愛知版) 第一号(1956・09)～第二二号(1958・8) 難波英夫(編集)
- 日本国民救援会中央本部
- 救援通信(愛知版) 第二三号(1958・10)～第三四号(1959・12) 難波英夫(編集)
- 日本国民救援会中央本部
- あいち救援通信 第一号(1960・01)～第三〇号(1962・06) 日本国民救援会愛知県本部
- あいち救援通信 第三一号(1962・07)～第一二二号(1970・11) 日本国民救援会愛知県本部
- あいち救援通信 第一二三号(1971・01)～第一五三号(1974・01) 日本国民救援会愛知県本部
- 七・七大須騒擾事件控訴趣意書 大須事件被告有志 上告趣意書(大須事件) 永田末男
- 愛知県労働運動史 第一巻～第四巻 愛知県(編集) 第一法規出版株式会社
- 野田弥三郎著作集 第一巻～第五巻 哲学教程 野田弥三郎 小川町企画出版部
- 野田弥三郎著作集 翻訳・自伝 野田弥三郎 小川町企画出版部
- 日本政治史 I 西欧の衝撃と開国 信夫清三郎 南窓社
- 日本政治史 II 明治維新 信夫清三郎 南窓社
- 日本政治史 III 天皇制の成立 信夫清三郎 南窓社

(次頁に続く)

へ立ち上げ、独自の運動を展開。  
 また愛知県労働組合評議会(愛  
 労評)を母体とする「愛知人権連  
 合」を設立し、事務局長として活躍、  
 人権闘争、及び労働運動の発展に  
 尽くす。社会運動家顕彰碑の設立  
 に尽力し、戦前からの愛知県出身  
 の社会運動家を調べ上げ、その業  
 績とともに顕彰する事務局を長年  
 にわたり担った。鶴舞公園に建立  
 されている碑の前で毎年秋に社会  
 運動家顕彰祭が執り行われており、  
 その銘板には600名近くの運動  
 家が刻まれ、毎年増えている。今  
 年藤本功も顕彰されることとなる。  
 また、大杉栄、伊藤野枝とともに  
 に虐殺された橘宗一君の、その父  
 によってひそかに作られていた墓  
 碑が、1957年に名古屋で見つ  
 かって以来「橘宗一少年墓碑保存  
 会」の運動をつづけ、中心となっ  
 て活躍していた。この運動も引き  
 継がれている。

2007年6月14日、死去。

## 藤本文庫・目録(第1回) 続き

日本政治史 IV 大東亜戦争への道	信夫清三郎	南窓社
名古屋地方労働運動史〔明治・大正篇〕	齋藤勇	風媒社
日本労働組合物語 明治	大河内一男/松尾洋	筑摩書房
日本労働組合物語 大正	大河内一男/松尾洋	筑摩書房
日本労働組合物語 昭和	大河内一男/松尾洋	筑摩書房
反戦資料 捕虜になった日本兵士が編集した資料	鹿地亘(編)	同成社
私の秩父地図	井出孫六	たいまつ社
秩父困民党紀行	井出孫六	平凡社
秩父困民党	井出孫六	講談社
自由自治元年 秩父事件資料・論文と解説	井出孫六	現代史出版会
峠を歩く 歴史紀行	井出孫六	筑摩書房
小熊秀雄全詩集	小熊秀雄	思潮社
中野・金子・小熊詩集	中野重治/金子光晴/小熊秀雄	新日本文学会
金子光晴全集 第一巻～第五巻	金子光晴	昭森社
金子光晴新詩集 II	金子光晴	勁草書房
どくろ杯	金子光晴	中央公論社
日本の芸術について	金子光晴	春秋社
金子光晴文学的断想	金子光晴	冬樹社
詩人 金子光晴自伝	金子光晴	平凡社
日本人について	金子光晴	春秋社
西ひがし	金子光晴	中央公論社
愛と詩ものがたり	金子光晴	サンリオ出版
天邪鬼	金子光晴	大和書房
人非人伝	金子光晴	大光社
新雑事秘辛	金子光晴	濤書房
鳥は巢に 未完詩集 六道	金子光晴	角川書店
金子光晴詩集	金子光晴	創元社
若葉のうた 孫娘・その名は若葉	金子光晴	勁草書房
金子光晴詩集	金子光晴 茨木のり子(編)	彌生書房
屁のやうな歌	金子光晴	思潮社
花とあきビン	金子光晴	青娥書房
風流戸解記	金子光晴	青娥書房
絶望の精神史 体験した「明治百年」の悲惨と残酷	金子光晴	光文社
金子光晴・草野心平 日本詩人全集 24	金子光晴/草野心平	新潮社
詩の本 I 詩の原理	金子光晴/大岡信/小野十三郎他 西脇順三郎/金子光晴監修	筑摩書房 (続く)

### 望月桂の手紙、和田久の墓



▲和田久の墓



▲望月桂のスケッチとサイン

岩佐作太郎さんと綿引邦農夫さんが遺されたアナキストクラブの資料を戸田三三冬さんのところで少しずつ整理する手伝いをしていく。写真の整理が一段落ついたところで書き残された岩佐さんの書や、お二人の書簡などに手を広げているが、その一端を紹介してみる。

綿引さん宛の望月桂さんの手紙がある(一九七二年五月三日付)。その一通に「過日他から久太の墓

で問合せがあったが……、作明美旅行の途次に探し当てて来たから、案内図と墓碑のスケッチを送る」とあり、同封されていたスケッチとサインを掲げてみる。

ゆうの会に平山さんに墓のことをたずねると、写真を送ってくれた。「何年前か前、ゆかりのある人が新しくしたようで」とも書き添えられていて、スケッチと現在の写真を比べると、姿が違っている。墓所は、兵庫県の明石駅近くの光明寺で、平山さんは「事前に連絡していただければいつでもご案内します」とのことです。

また手紙には「俺も久太の注文で死灰で月見草に花を咲かせてやった」と記されている。ちよつと意味が分からなかったのだが、これは本当に遺灰で(もちろん土に混ぜてということであろう)月見草の花を咲かせた。戸田さんがその鉢を見たと言ってくれた。

☆



大澤正道さんの傘寿と著作『忘れられぬ人々』の発刊を祝う会で 10月14日

### ☆Tシャツ販売中! ☆

今年の夏のキネマ・フェスタに合わせて、文献センター、フェスタ(スペイン革命)、ゲバラと三種のTシャツを制作しました。サイズは、150、S、M、L、の四つ。アメリカンサイズです。

CIRA-J ▶

▼キネマ・フェスタ



◀ゲバラ

※XLサイズは在庫限りです。サイズと数に限りがありますので、ご注文の上、

で大きめです。一着二千元で、収益は、センターの運営費になります。協力をお願いします。申し込みは、郵便振替か、メールで、サイズ・種類を明記して文献センターまで。送料は無料です。イレギュラーでも扱っています。

## 文献センター 自己紹介 4

最近のように多くのアナキズム関係の本が出版されるようになったのは七一年以降のことであり、その頃は、アナキズムに関連した書籍がきわめて少なく読みたいと思ってもなかなか入手できなかった。文献の多くは大正、昭和初期の古いものが多く、戦後に出されたものも我々の欲求を満すにはあまりにも貧弱であった。そうした状況のもとで、文献類が一通り揃えられ、自由に利用できる場が望まれたことは当然と言えよう。私が当時接した本を思い出してみると、近藤憲二の『一無政府主義者の回想』、ウドコックの『アナキズムI・II』、あとは古書店で現代思潮社の『大杉栄全集』(全14巻)、秋山清『日本の叛逆

思想』、大沢正道『アナキズム思想史』などで、そのうちに秋山清の『ニヒルとテロル』が刊行されたといったところであった。

これまで述べてきたように、尾関弘にしても、私にしても、また龍さんにしてもかつてアナキズム時代に同様の構想を提出したことがあるといふように、センター設立に携わった個人は各様にそれぞれの経緯をもっていたと言える。

### 構想の拡大

龍さんとの交渉のために、翌十月の初旬に「ふもとの家」を訪ずれた。初対面であった。

保管の場所といっても、室の一隅をといてつくりであったが、龍さんから提案された構想は予想すらしなかった程に大きかった。それは、書庫兼閲覧室として別個に建物をつくるというものであり、旧センターの敷地を示された。こ

の段階で、文献センターの構想はふくれあがり、同時に具体性をもち始めた。

そして、龍さんの参加と構想の拡大のもとに十月二十六日付けで「日本アナキズム研究センターの設立について」のアピールが、二百枚程配布された。その後いくつかの問い合わせや寄贈書があったが、反響は別にとりたてるほどのものではなかった。これが、文献センターの出發であった。

センター設立の呼びかけが個人名で、しかも「作りましょう」ではなく、「作ったから協力を」といった形で出されたことは、その段階では全く実態の伴わない言葉だけのもの、いわばデッチ上げに似たものであったにもかかわらず、活動に対する一つの方法、一つの姿勢を示していたように思う。一つには、センターの設立を発起人や準備会を経て何らかの組

織形態を整えつつ建設する方法が考えられた。実際にそのような考え方に立つ提案と、意見が寄せられもした。センターを建設し、運営していくためには広汎な支持が必要であり、また有効であることを考えなかったわけではない。そのように考え、ある時期はその方向を探り出したが、現実には異なった形で建設が進められた。

そこには、実態は伴わなかったとしても、すでに「これでやろう」という意志一致が先行し、既成事実化していた。そして、その事実を越える何ものをも、他に見出せなかったのである。どんなに魅力的な方法であっても、活動の裏付けが得られず、また自からも確信するに至らない状況では、自分の足元を見つめていくしかない。また、センター設立の呼びかけの段階で、やれる者がやれる範囲で進めていこうという合意があった。そこには、おそらく他に、

へやる者は居ないであろう、しかし今やっておかなければ出来なくなることもあるし、本格的に開始されるまでの“つなぎ”“土台の一端にでも……”という予測が働いていた。

この考え方は、書庫建設を担った東京の“ばおばぶ”グループの活動においても明確にされた。そこには「形式にこだわらず、実際にやれるものがやれる範囲で進めていく」といった一致点があったと思うし、これはセンターの建設開始から現在までの一貫した活動の型である。

この考え方なり、活動の仕方は、自分たちだけでやるんだといった閉鎖性を含んだものではなく、自分たち出来るギリギリの所でやり切るしかないとする考え方、他に目を向け依存する活動よりもっと直接的に個々人の課題として向かう姿勢として理解したいと思う。

(続く)

## 富士宮だより

九月になっても夏の暑さを引きずるように暖かい日が続き、山の様子も少し変。コケモモは採れるがキノコが見当たらない。他のキノコ狩りに来ている人たちの籠も空っぽ、三回行って同じ結果だった。それでも十月に入ると秋も深まり、毎週末富士山の二合目辺りにキノコ狩りに行っている。そこで出会う人たちの話を聞くと、やはり今年は去年よりキノコの発生が二週間ほど遅れているようだ。林の中からは鹿の鳴き声も聞かれ、出会うこともたびたび。ウソやゴジュウカラ等の山鳥も間近に見ることが出来る。山に入っているとその心地よさから疲れもあまり感じず、五〜六時間があつという間に過ぎて行き、帰ってからのキノコの処理作業（これがまたタイヘン）のことも考えず歩き

回っている。

十月二十八日、台風一過の快晴。昨日の雨は富士山では雪だったらしく、五合目辺りまで積雪が見られ、先週末まではそれ程気にならないかった紅葉も、こんなにも変わるのか、という位一気に色づいた。そろそろキノコも終わりか……？

現在、愛知人権連合・橘宗一少年墓前祭を主催していた故藤本功さんの蔵書の目録を作成している。九月十日に名古屋から引き取ってきたのですが、アナ系ではなく、共産党系が多いので多少の戸惑いもあるがなんとかやっています。センターの蔵書が増えるのは嬉しいのですが、平井さん、藤本さんとそれぞれ頑張っている人達が亡くなって本が増えていくのはやはり悲しい限りです。

前にも書きましたが私、センターの作業と並行して、戸田三三冬さんを中心にアナキストクラブ

の例会（作業）として三ヶ月に一度、戸田さんのお宅でマラテスタ研究会共催？で、クラブの今は亡き年寄りたちの遺産の整理を行っています。センターのO氏とK氏の協力もあつて昨年の九月からすでに一年、時間は少ないが順調に進んでいます。綿引さんや、岩佐老人の写真を見やすく整理していくと、集合写真に写っている人たちの名前が分からない。その人たちを知る人ももうわずかしかな居ないと思うと作業を急がなければと焦るばかり。今年九月の作業では岩佐老人のものと思われる《書》がたくさん出てきた。自筆の原稿などもこれからどのように保存していくのか、課題はセンターと同じく山積みです。（山田）

【作業メモ】8月12日 名古屋の藤本功さんの旧蔵書について西村さんよりセンターへの寄贈の打診があり、西村・奥沢が名古屋の窓

口となっている黒沢和子さんの案内で、同氏旧宅を訪問、蔵書の概要をみる。

9月10日 蔵書を受け取るため早朝、3時起床で富士宮から2トン車で山田、奥沢が名古屋に向かう。現地集合で関西より西村、松原、今西、千々岩が参加。9時午後3時荷造りと積み込み作業。荷降ろし作業の手伝いのため今西さんを含め3人で富士宮へもどる。夕方6時作業完了。

9月14日～17日 富士宮集会の作業として、藤本文庫のダンボール箱の作業。15～16日は本の区分けで、とくに定期刊行物(『救援通信』『方位』等)で終日追われる。17日は不用資料の処分。

9月30日 岩佐・綿引旧蔵資料の整理(戸田三三冬宅)。山田・古屋・飛矢崎・小川・奥沢が参加。

10月14日 大澤正道さんの傘寿と著作『忘れられぬ人々』の発刊を祝う会 東京・小石川後楽園の渙徳亭

(5時～8時半)に参集した。富士宮からは龍さんが参加。

11月3～4日 米国バーモント州で開催予定のRAT(アナキズムの伝統の更新)研究会に千々岩が参加。11月10～11日 藤本文庫の資料整理(写真・墓前祭関係)作業。10日夜、キノコ(7種類)で御飯とみそ汁。



新刊紹介

西山拓著

『石川三四郎のユートピア―社会構想と実践』

2007年10月刊 冬至書房

A5判・並製 259頁

定価(3000円+税)

大澤正道著

『忘れられぬ人々』

2007年10月刊 論創社

四六判・上製 303頁

定価(2500円+税)

★運営委員会議事録(抄)

九月運営委員会

九月富士宮交流会と重なり、運営委員会は行われなかった。

十月運営委員会

十月二〇日(土)

■事務所について

現在、東京の連絡場所となっている新宿区・三月工房の場所をアナキズム誌編集委員会等と正式にシェアすることで調整することとした。

■二〇〇八年版カレンダー

一時見送りが検討されたが、〇八年版は卓上カレンダー(ポストカードサイズ)として発行する。

※既に発売中

■会員募集について

新規会員の募集と現会員には継

続のお願いをする。

■CIRAへのカンパ

シネマフェスタの黒字分の取り扱いについて、CIRAへカンパすることの正式依頼を、共催したアナキズム誌編集委員会に打診する。

■法人化について

法人として、LLC合同会社の検討を開始する。できるだけ早く定款のタタキ台を作成する予定。

アナキズム文献センター通信

第5号

発行/二〇〇七年十一月二五日

発行所/アナキズム文献センター

編集/運営委員会

連絡先/東京都新宿区新宿

1の30の12 三月工房気付

郵便振替口座/

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール/

info@cira-japan.net

定価/一部一〇〇円